

# 伏見院の悲秋歌 —— 『玉葉集』四六三番歌と『礼記』月令 ——

中村健史

1

五十番の歌合に秋露を詠ませ給うける

院御製

我も悲し草木も心傷むらし秋風触れて露くだるころ

『玉葉集』秋上・四六三番に収められた伏見院の詠である。

詞書にいう「五十番の歌合」は、乾元二年閏四月二十九日（一三〇三年）に行われた「仙洞五十番歌合」を指す。二十一番左歌。京極為兼の判詞に「左、心詞巧みにして、凡俗の界を隔つ。

右歌さらに及びがたき由、再三申し侍りしを、仰せにて持の字をつけられ侍りにき」と見え、後年「金玉歌合」（院と為兼の撰歌合）に撰入するなど、およそ三千首に及ぶ御製のなかでも格別の秀歌として知られる。

その注釈は少なくないが、今、かりに岩佐美代子氏、佐藤恒雄氏、井上宗雄氏の訳文を引くことにする。

私も悲しい。草木も心に悲傷の思いを感じているようだ。

秋風が草木にふれ、それに感応して露が秋天から降りお

頃は。

（岩佐美代子氏『あめつちの心 伏見院御歌評釈』笠間書院、一九七九年）

私も悲しい。ものいわぬ草や木もまた心をいためているらしい。秋風がありとあるものに触れて、秋天から露が降り置くころともなると。

（佐藤恒雄氏『新日本古典文学大系 中世和歌集 鎌倉篇』岩波書店、一九九一年）

私も悲しい。草木も悲しみにくれているようだ。秋風が草木に触れ、露がおりるころは。

（井上宗雄氏『新編日本古典文学全集 中世和歌集』小学館、二〇〇〇年）

もとより細かな相違はあるものの、おおむね「秋風が触れ、露がくだるとき、私も、草木も心傷むのだ」というのが、一首の大意と見て誤りないだろう。さほど込みいった内容を詠んでいるわけではないが、おおらかな調べはいかにも帝王ぶりと呼ぶ

にふさわしい。

歌中に「悲し」「心傷む」といった表現が見られるのは、秋が悲しみの季節だからである。この点については、阿尾あすか氏『コレクシオン日本歌人選 伏見院』(笠間書院、二〇一一年)における注釈がくわしく解説している(文中の引用は、前者が『楚辞』九弁、後者が曹丕「燕歌行」)。

「悲秋」という言葉がある。万物が枯れ、冬の衰退へと向かう秋は、悲哀の情をかきたてる。今から見れば、当たり前のことのようにだが、『万葉集』では、草木が紅葉し彩りを見せる秋は、春と甲乙つけがたい美しい季節として捉えられた。秋を悲しいものと思うのは、平安時代に漢詩から影響を受けた後の発想であった。

この歌も、「悲秋」の発想に基づいている。すべてが衰退へと向かう秋を、自分が悲しんでいるように、草木も秋の到来を悲しんでいるせいか、秋風と露に退色して、やがて枯れ落ちてゆく。漢詩にも、「悲シキ哉、秋ノ氣為ル。蕭瑟トシテ草木揺落シテ変衰ス」、「秋風蕭瑟トシテ天氣涼シ。草木揺落シテ露ハ霜ト為ル。…君ガ客遊ヲ念ヒテ思ヒ腸ヲ断ツ」などあるように、秋の到来は、秋風と露霜に弱り、枯れ落ちる草木の様子によって、認識されるものであった。この歌では、作者も、草木も、涙のような露を降らせる天も、皆が秋を悲しんでいるという。

悲しみの季節として秋をとらえる発想は、京極派の歌人たちにもひろく共有されていた。たとえば『玉葉集』の秋部を繙くだ

けでも、

風に聞き雲に眺むる夕暮の秋の愁へぞ耐へずなりゆく

(永福門院・秋上・四八五)

また秋の愁への色に向ふなり尾花が風に庭の月影

(源親子・秋上・五三五)

野山にも秋の愁へやひとつならし小鹿妻訪ひ虫も鳴くなり

(後伏見院・秋上・五六〇)

といった例を見出すことができる。伏見院はこうした「秋の愁へ」という考えかたに基づいて、「我」や「草木」の悲しみをうたったのである。(あるいは、勅撰集初出となる「心傷むらし」の句も、同じく秋の悲しみを扱った「今朝の朝け雁が昔聞きつ春日山もみちにけらし我が心いたし」(穂積皇子『風雅集』秋中・五五二、『万葉集』巻八・一五二三)の影響によるか。)さらにまた、私見によれば、当該歌と悲秋観の結びつきは「秋風触れて」という下句からも裏づけられるように思う。『伏見院御集』には

耐へずなる秋の心を風に受けて触るる草木もなべて悲しき

〔伏見院御集〕四七五「秋風」

秋に傷む風の心を四方に受けて触るる草木はみなしほれけり

〔伏見院御集〕八四五「秋風」

のように、秋風が草木に「触れる」ことを詠んだ作品が見出さ

れる。

「耐へずなる秋の心」「秋に傷む心」とは、言うまでもなく、悲秋の情を指す。院によれば、こうした「心」は、風によつてひとしく万物に分かち与えられるのだと言う。たとえば、秋風が吹き、草木に触れる。そのとき、風から秋の心を受けとつた草木は、ことごとく悲哀に沈み、しおれてゆく。風に「触るる」とは、つまるところ、「秋の心を風に受けて」と同義なのである。

そもそも「風触る」という表現は、「夕されば門田の稲葉風触れてなにそよ秋の心づくしぞ」（源通親「正治初度百首」五五）のように、風が吹きよせるさまをあらわすものであった。しかし、伏見院の歌では、そのような言いまわしの背後に「秋風が悲秋のころを伝える」という発想が潜み、分かちがたく結びついているように思われる。すなわち「秋風触れて」とは、「草木も心傷む」ことのきつかけとして、歌中にはたらくのではない。悲秋観の影響は、こうした点にも認めることができよう。

## 2

秋が悲しみの季節であるとする阿尾氏の指摘は、伏見院詠においてきわめて重要な意味を持つ。だが、悲秋観という問題を踏まえても、なおこの歌にはよく分からない部分が残る。

たしかに、秋は悲しみの季節であった。そして、先に触れたとおり、院は「秋風が草木に悲秋のころを伝える」とも考えていた。しかしそれならば、なぜ悲しみを感じるのが「秋風触

れて露くだるころ」でなくてはならないのか。本来であれば、「秋風触れて」というだけで、草木は心傷むはずである。あえて「露くだるころ」と加えられた背景には、どのような理由があるのだろうか。露という景物は、いかにして悲しみと結びつくのか。

この点については、佐藤氏『新大系』に

露は草木の涙。秋の到来とともに感じはじめゆるえ知らぬ悲しみを、ものいわぬ草木に及ぼした。

井上氏『全集』に

草木に露が置くのは、寂しく吹く秋風に、感じて涙を流すことを暗示。

という注が見え、さらにまた、井上豊氏『玉葉と風雅』（弘文堂、一九五〇年）でも「露」は「われもかなし」と呼応して暗に涙を連想させる」と解するのであった。もとより、王朝和歌において露を涙に見立てることは常套に属する。伏見院の歌は「露が草木の涙のようだ」とあからさまに言っているわけではないが、『全集』のいわゆる「暗示」の効果は当然考えてよいだろう。『御集』には、

秋はこれもろきあはれの時にあれや草木の露も人の涙も

（『伏見院御集』二二〇〇「秋露」）

「秋はすべてがおとろえゆく哀れの季節であつて、森羅万象が悲しみにおおわれる。草木には露が置き、人は涙する」という歌も見えた。草木にとって、露は、人間における涙のような存在なのである。

類想歌は少なくない。

草木みな露を含めり我ひとり秋につれなき袖ならめやは

〔伏見院御集〕二〇九四〔秋露〕、切一四・五〔露〕

秋の風は草木の露に吹きしほり袖に触れても涙をぞなす

〔伏見院御集〕二二一八〔秋〕

秋に逢ふ草木のほかの袖をさへ今より露の宿りとやする

〔桃花水〕所収広沢切・切一七・一〔露〕

あるいは「秋になつて、草木も露を宿しているというのに、私ひとりだけ袖を濡らさないということがあろうか」と詠い、あるいは「秋風が草木に吹けば露を宿し、袖に吹けば涙を拭わせる」と詠う。三首目は「秋になると、草木に露が置くように、私の袖にも涙が落ちる」の意。やはり露は涙であり、涙は露なのである。

右に引いた四首に共通するのは、「秋の悲しみが、人間においては涙としてあらわれ、草木においては露となる」という理解であつた。こうした伏見院の自然観からすれば、佐藤氏、井上氏らの言うように、「露」が草木の涙として描かれている可能性は高い。草木が涙を流すとき、人もまた悲しみを感ぜずにはいられないのである。<sup>(1)</sup>

したがって、先に引いた阿尾氏『日本歌人選』の注では、結

句について「涙のような露を降らせる天も、皆が秋を悲しんでいる」と指摘した上で、全体を

私も悲しい。草木も心を傷めているようだ。秋風が吹いて草木に触れ、また、その秋を悲しむ天から、涙のような露が草木へこぼれ落ちてくる頃は。

と訳しているが、この場合、「露」を天の涙とするのは当たらないように思う。「空からこぼれ落ちた露が草や木に宿り、それがあたかも(草木の)涙のように見える」と解釈したほうが、類想歌の内容から言っても、より自然ではないだろうか。

以上、「露」が涙を暗示するという解釈について検討してきた。だが、伏見院詠において露の持つ意味は、はたしてそれだけなのだろうか。特に気にかかるのは、なぜ「秋風触るるころ」でもなく、「露くだるころ」でもなく、「秋風触れて露くだるころ」なのかという点である。すでに見てきたように、風も、露も、それぞれに秋の悲しみをあらわす景物であつた。「我も悲し草木も心傷むらし」という内容を詠みたいのであれば、どちらかひとつで充分なのであつて、かならずしも二つのものを組みあわせる必要はない。なぜ、秋風と露なのだろうか。

三たび『伏見院御集』に就いてみたい。秋風と露とともに詠んだ歌は同集に多く見られるが、今、ことに我々の興味を引くのは次のような例である。

秋に明るる朝の原の風の音にやがてや露もこぼれそむらん

〔伏見院御集〕三八九〔原初秋〕、二〇六三〔原初秋〕

秋の露結びかそめんからころも秋涼しみ風立ちぬなり

『伏見院御集』九六九、一三二六四)

鹿の音の添はぬばかりぞ秋ならぬ露と風との山陰の暮れ

『伏見院御集』一二二六七)

まだきより露と風とに秋やかよふ夏野の薄穂には出でねど

『伏見院御集』一六四五)

一首目は詞書に「初秋」の文字が見える。「秋に明くる」とは立秋を言うものであろう。「秋になって最初の朝。野原を渡る風を聞くと、もうすぐ露もこぼれはじめそうだ」。

二首目は「袂に涼しい風が吹きはじめた。野原にはもう秋の露が降りはじめているのだろう。ああ、秋になったのだな」の意。

三首目は晩夏の歌。「秋ではないけれど、山陰には、露があり、風がある。鹿の声が聞こえないだけで、ここはもう秋なのだ」。夏の終わり、山陰のあたりでは一足早く秋を感じるとうたう。

四首目も晩夏の様子を詠んだもの。「夏の野原の薄は、まだ穂も出ていない。けれども、露と風に秋を感じる。秋はまだなのに、秋のような風景だ」。

ここに挙げた四首は、いずれも風と露によって秋を感じるという内容の歌である。なかならず、後半に掲げた二首（鹿の音の「まだきより」）では、「季節はまだ秋になってないのに、風や露があるせいで、あたかも秋のように感じられる」とさえ詠っている。風や露は「鹿の音」「薄」と並ぶ秋の景物なのである。

このような発想は伏見院にかぎらない。『玉葉集』に収める冷泉為相詠、

今朝よりは吹きくる風も置く露も袖にはじめて秋ぞ知らるる

『玉葉集』秋上・四五二)

「今朝からは、風や露を袖に感じて、秋が来たのだなと知られる」。詞書には「初秋朝といふことを」とあった。「吹きくる風も置く露も」という対句的表現に注目したい。明らかに風と露が並列され、そのことによって「初秋」の季節感が象徴されている。

### 3

引きつづき、下旬「秋風触れて露くだるころ」について考えてみたい。

風と露とによって秋の訪れを知るという歌は、『伏見院御集』にも、『玉葉集』にも見られるものであった。しかし、こうした趣向は、かならずしも伏見院、あるいは京極派の歌人たちによる独創ではない。遠く漢籍のうちにその源を求めることができ。

『礼記』月令篇、孟秋の条に次のような文章が見える。

孟秋の月、(中略)涼風至り、白露降り、寒蟬鳴き、鷹乃ち鳥を祭る。用つて始めて戮を行ふ。

(孟秋之月、(中略)涼風至、白露降、寒蟬鳴、鷹乃祭鳥。用始行戮。)

「秋のはじめ(七月)には、涼しい風が吹きはじめ、白露がくんだり、寒蟬が鳴く。鷹はとらえた小鳥をすぐに食わず、しばらく並べておく。このように秋は冷厳の季節であるから、為政者もそれにしたがって刑罰を行う」。鄭注に「皆な時候を記せるなり」とある。

「涼風至り、白露降る」の二句に注目したい。単に風と露の取りあわせが共通するだけではなく、それらがともに初秋の象徴として扱われている。先に引いた伏見院詠のうち「鹿の音の添はぬばかりぞ秋ならぬ露と風との山陰の暮れ」「まだきより露と風とに秋やかよふ夏野の薄穂には出でねど」などは、明らかに『礼記』を典拠とするものと言えよう。当該歌の「秋風触れて露くだるころ」という表現もまた、月令に基づくと考えるべきではないだろうか。

もっとも、露とともに風を詠むことは、和歌においてひとつの型となっているから、月令との一致は偶合に過ぎないという意見もあるだろう。しかし、こと「秋風触れて露くだるころ」にかぎっては、より細かな言葉づかいに『礼記』の影響が認められるのであった。

「露くだるころ」という結句に注目したい。そもそも、露は折りて見ば落ちぞしぬべき秋萩の枝もたわわに置ける白露

(よみ人しらす『古今集』秋上・二二三)

草の糸に貫く白玉と見えつるは秋の結べる露にぞありける

(藤原守文『後撰集』秋上・二七〇)

のように「置く」「結ぶ」と表現するのが普通であって、「くだる」の語を用いることはきわめて稀である。今、試みに『新編国歌大観』によつて検索すると、伏見院以前の用例としてはわずかに次の二首を得るに過ぎない。(このうち『為家集』の歌は「雨の重みで竹がしだれているために、露は枝の先端へと流れてゆく。露がくだるように見えても、実は枝をのぼっているのだ」という機知の作で、空から降りくだる露を詠んだものではない。)

露くだる星逢ひの空を眺めつついかで今年の秋を暮らさむ

(『義孝集』五)

雨重き籬の竹の折れかへりくだればのぼる露の白玉

(『為家集』二〇八四)

したがって、院が「露くだるころ」という表現を和歌から学んだとは考えづらい。

ところが、『礼記』の本文には「白露降」とある。そして、鎌倉時代のころ、この「降」字は「クダル」と訓読することが一般的であった。たとえば観智院本『類聚名義抄』(一二四一年写)には「降 音絳 クダス(下略)」と見える。「クダス」とも、「クダル」とも訓むの意であろう。また十卷本『伊呂波字類抄』にも「降 クダル」とあった。

訓点資料では、金沢文庫本『群書治要』巻七が『礼記』月令篇の文章を引いて次のように施訓している(経部は清原教隆が

一二五三〜五七年の間に加点。

時雨將降ツクリナ

(季春「時雨將に降らんとし、下水上り騰る」)

霜始降ツキ

(季秋「是の月や、霜始めて降る」)

ともに雨、霜などについて「クダル」の語を用いる。残念ながら、孟秋条「涼風至、白露降」は同書に引用されないため、その訓読を知ることができないが、右の例から推して「白露降る」と訓まれていた可能性は高い。「露くだる」とは「白露降る」をやわらげた表現ではなかったのか。

さて、ここまでの考察におおむね誤りなく、伏見院詠の典拠が『札記』月令にあるとするならば、「秋風触れて露くだるころ」とは、何よりもまず、孟秋、すなわち秋の訪れをあらわす表現であった。そして、

うちつけにものぞ悲しき木の葉散る秋のはじめを今日ぞと  
思へば

(よみ人しらず『後撰集』秋上・二二八)

以来、「秋のはじまりにこそ、その悲しみがいつそう深く感じられる」と詠うことは、秋歌の定型である。ほかならず『伏見院御集』のうちにも、

思ひかぬるもとの愁へに今よりの秋の心をなほや加へん

『伏見院御集』三七七「早秋」、四六七「早秋」  
今日と言へば何の愁への添ふとなみ秋とし聞くぞただにわ  
びしき

『伏見院御集』四四二「秋立日」  
露を置きて涙ぞしるき今よりの愁への袖の秋の夕暮れ

『伏見院御集』四四四「秋立日」  
今よりの時は愁への秋なれば草木もなべて露を含めり

『伏見院御集』一〇〇二「露」

「もともと愁いに沈んでいた私の心は、秋の訪れによって、さらに深く物思いをするはめになってしまった」「これといった理由もないのに、秋と聞くや、たちまち心に愁いがおとずれる」といった歌が見出される。

初秋の季節感は、「悲し」「心傷む」といった心情と深い関係を持つ。悲しみをもっともつよく感じるのは、秋がはじまろうとするそのときなのであった。だからこそ院は、あえて孟秋の条を踏まえ、「秋風触れて露くだるころ」と詠うのである。先行の注釈はいずれも指摘していないが、当該歌が月令を典拠とすることは、この点においてきわめて大きな意味を持つ。「秋風」や「露」を単なる風景描写と取っては、一首の意を見誤ることになる。

風が立ち、露の置く早秋のころ、人は改めてそれが悲しみの季節であることに気づく。折から吹きつける風は、草木に秋の愁いを伝え、梢には涙のような露が宿る。悲しいのは、私だけではない。草も、木も、秋を迎えて、あのように心を傷めている。悲傷の情をまぬがれたものなど、天地の間、何ひとつあり

はしないのだ。——伏見院は、そのように詠おうとしたのではないか。

4

以上、本稿では伏見院詠の下句が『礼記』月令に拠ること、それが歌中にあらわれる悲秋観と深いかかわりを持つことなどを論じてきた。

ところで、この歌については、岩佐氏の『あめつちの歌』に次のような指摘が見られる。

この魂の底からゆり動かされるような悲傷は一体どこから来たものでしょうか。「秋風ふれて露くだる頃」といえばまだ初秋の感触ですし、事実この歌は玉葉集では七夕の歌群の直前に入っています。季節に対比して余りにも深刻なこの傷心と、玉葉集での排列のあり方から、私はこの歌の背後に一人の女人の面影を想像するのですが……。

秋のはじめつかた、近くさぶらひなれたる人の身まかりにければ

彦星のあふてふ秋はうたて我ひとに別るる時にぞありける

(風雅、一九七八)

を始め、広沢切に「七夕」と題してくりかえし詠まれているその人。(中略)もとより最愛の近侍の女房にちがいないりません。おそらくこの不幸は前年の初秋におこり、ようやくまぎらせたその悲しみを「秋露」の歌題が触発して、思わずも院にこの哀慟の絶唱をなさしめたのではない

でしょうか。(中略)かくまで院に愛された女性の名は坊門三位基輔女、後伏見院兵衛督、その忘れがたみは後年風雅集の代表歌人進子内親王になる——と、私の想像はそこまでエスカレートしてしまうのですが(小著『京極派歌人の研究』三八八ページ以下参照)、そこまで立ち入った推理は暫く措き、この歌の持つ緊張した悲痛な美感の魅力はちょっと他に類がありませんまい。

かつて伏見院は、秋のはじめのころ、「近くさぶらひなれたる人」の死に遭い、その悲しみを「彦星は織姫と逢えるのに、私はあの人と逢えない」と嘆いた歌が『風雅集』に撰入している。院にとつて、七夕は恋人との別れを思いおこさせる季節であった。「我も悲し」の歌は『玉葉集』で七夕歌群の直前に並べられており、同じ「人に別るる」経験によつて詠まれたことを示唆するのではないかと、という推考である。

この説は同氏『玉葉和歌集全注釈』(笠間書院、一九九六年)でも

一般的な秋思の域を超えた、鮮烈な悲傷である。院には、「秋の初めつかた、近く侍ひなれたる人のみまかりにければ彦星の逢ふてふ秋はうたて我ひとに別るる時にぞありける」(風雅一九七八)をはじめ、七夕の直前に愛する女性を失った哀傷歌が多い。この歌はそうした体験を昇華し玉成した一首か。

と引きつがれ、近年では阿尾氏『日本歌人選』が「しかしなが



ら、一方で、秋がそこまで悲しいのは、伏見院にとつて、この季節が、ある別れを思い起こさせるからであつたという。「伏見院には、他にも七夕と、愛する人との死別を結びつけて詠んだ歌が多く残っており、受けた衝撃の大きさが量り知られる」と紹介している。

しかし、「我も悲し」という表現を「近くさぶらひなれたる人」の死に結びつけることは、はたして可能なのだろうか。

岩佐氏説の大きな拠りどころとなっているのは、「この歌は玉葉集では七夕の歌群の直前に入っています」という「排列のあり方」であつた。たしかに『玉葉集』巻四・秋上を見ると、巻頭歌「しのめの空霧りわたりいつしかと秋の景色に世はなりにけり」（紫式部・四四九）にはじまつて、伏見院詠の直前まで初秋の歌がつづき、その後七夕歌群が置かれている。

#### 従三位親子

秋にこそまたなりぬれと思ふより心にはやく添ふあはれか  
な

(四六二)

五十番の歌合に秋露を詠ませ給うける 院御製  
我も悲し草木も心傷むらし秋風触れて露くだるころ

(四六三)

弘長百首歌に七夕を

前大納言為家

ひさかたの雲井はるかに待ちわびし天つ星逢ひの秋も来に  
けり

(四六四)

だが、先に述べたように、四六三番歌の下句「秋風触れて露くだるころ」は『礼記』を典拠とし、秋のはじまりをうたう措辞にほかならない。さらに「悲し」「心傷む」といった思いは、初秋のころ、改めて深く感じられるのもあつた。たとえば右に引いた三首のうち、親子詠（四六二番歌）は「秋になつたと思うと、はやくも心のうちに哀れが添う」とするが、これなどは当該歌とほぼ同じ主題を扱うものであり、両者は強い結びつきを持つと言えよう。「我も悲し」の一首は、『玉葉集』のなかで初秋歌をしめくくる作品として取りあげられた可能性が高いのである。

一方、この歌が「七夕の歌群の直前に入つて」いることについては、そこに作者、撰者の意図がどの程度まではたらいているか、かならずしも分明でないように思う。岩佐氏の言われるように、七夕と何らかの関係があるのかもしれないが、少なくとも内容的な関連がはっきりと認められるわけではない。初秋歌の場合と違つて、「天つ星逢ひ」を詠う為家詠（四六四番歌）とのあいだには、多少の隔たりが感じられる。

とすれば、「広沢切に「七夕」と題してくりかえし詠まれてゐるその人」とのかかわりについては、いささか再考の余地が生ずるのではないか。<sup>三</sup>

もとより、文学作品に拠つて、作者の思いをすべて明らかにすることはできない。言葉にあらわれなくとも、心のうちには「一人の女性の面影」がわだかまつていたのだ、という反論もありえよう。また、伏見院詠が初秋の歌であることは動かないとしても、それがあえて七夕歌群の直前に置かれたことをいっそう重視する立場もあるに違いない。

いま、こうした問題について、さらに論ずるだけの用意は稿者がない。ただ、従来の注釈では「我も悲し」の歌が『礼記』月令を踏まえることを考慮しないまま、「近くさぶらひなれたる人」とのかかわりが取りざたされてきた。そのような状況は、今後、やはり見直してゆく必要があるのではないか。本稿を成す所以である。

〔注〕

(一) 以下『新編国歌大観』の番号を示す。広沢切断簡については『伏見院御集「広沢切」伝本・断簡集成』(笠間書院、二〇一一年)に拠った。

(二) 岩佐美代子氏『京極派和歌の研究』(笠間書院、一九八七年)は次のように指摘している。「伏見院は、自らの存在を含めたあらゆる現象の中に、宇宙の意志によってゆるされ、天地の心、神の心を分かたれ受け持った「心」が貫通しているとうたう」。

(三) 岩佐氏の解釈に従えば、歌中の「我」は伏見院その人を指すこととなる。だが、「草木みな露を含めり我ひとり秋につれなき袖

ならめやは」のような類想歌において、「我」は明らかに「草木」のような自然物(あるいは、非情のもの)と対比されていた。秋の心は、草木のような非情のものにも、私のような有情の存在にも、ひとしく訪れるというのである。また「秋はこれもろきあはれの時にあれや草木の露も人の涙も」では、当該歌の「我」を「一人」に置きかえて、ほぼ同じ内容が詠まれている。「我」はだれか特定の個人というよりも、人間全体(あるいは、有情のもの全体)の代表という意味合いがつけよいのではないか。四六三番歌の主題はあくまでも「秋が訪れ、万物が悲しみに彩られる」というところにあつて、「我」「草木」は任意に選ばれた例に過ぎない。「草木」がどれか特定の木、特定の草を指すのではないのと同様(伏見院によれば、「自らの存在を含めたあらゆる現象」が秋の心を受け、悲しみに満たされているのだから、特定のどれかひとつを取りあげることの意味はない)、「我」もまた伏見院個人に結びつけないほうが、より歌の趣意にかなうように思われるのである。

(なかむら たけし・本学文学部非常勤講師)